

平成30年度 月刊 校長通信 9号

(生徒・保護者版)

H30.12.26 (12月号)



俊英NOW

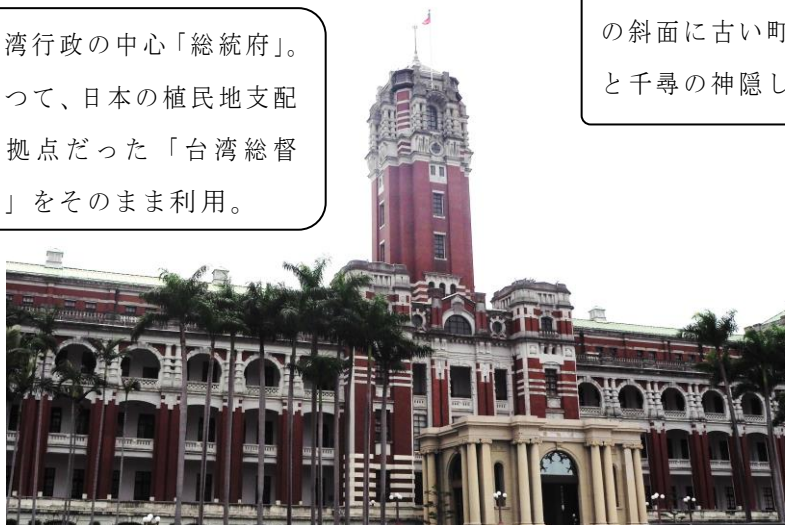
●台湾修学旅行

12月3日～6日、3泊4日間の日程で台湾への2学年修学旅行がありました。訪問したのは台北とその近郊に限られ、期間も短いものでしたが、異文化に触れる経験は、食べられなかった料理も含めてそれなりに貴重であり、得るものは大きかったと思います。

3泊したシーザーメトロ台北ホテル



台湾行政の中心「總統府」。
かつて、日本の植民地支配の拠点だった「台湾総督府」をそのまま利用。



かつて金鉾山のあった台北近郊の町、「九份」^{きゅうふん}。山の斜面に古い町並みが残し、名所となっている。「千と千尋の神隠し」のモデルになったとか。



九份で出会った犬。



生徒たちは、日本語を学ぶ大学生とグループ自由行動。その間、中川先生と私は、台湾の最難関大学、「台湾大学」を訪問しました。地質標本館を見学。写真は、台湾大の学生さんから台湾の地質についての説明を聞く中川先生。



台北の地下鉄の切符は、プラスチックのコイン。

校長ESSAY

ねずみ騒動



12月中旬のこと、妻が「机の上のりんごかじった？」と聞くので「ねずみじゃあるまいし。」と否定したが、実はホントにねずみだったのだ。その後、パンの入った袋に穴が空いていたり、棚の洗剤などが床に散らばっていたりと変事が続いた。ついに、あちこちから米粒より大きめの黒いかたまり（つまり、糞）が発見されるに及んで、ねずみの存在が確定した。「何とかして！」と訴える妻に、のらりくらりしていたら、妻がねずみ捕り器を買ってきた。仕掛けた餌を食べると入口がパチンと閉まるという優れもの。しかし、まったく効果がなかった。すると事態はさらに悪化。朝起きると居間の戸がバリバリかじられ、床に木屑が散乱していた。その後、柱や襖がさらに3箇所もやられた。もう許せん！どうしてくれよう。毒餌を買って家中に仕掛けるしかないだろうということになった。

そんな矢先の12月17日、母が仏間を駆け抜けるねずみを目撃、捜すと部屋の隅の暗いところにじっと固まっていた。ぴくりとも動かず死んだふりをしている。捕虫網を持って近寄ると、突然脱兎（いや脱鼠？）のごとく脱走、悲鳴をあげる妻の足元をすり抜けて階段を駆け上がり、今は空き部屋になっている娘の部屋に消えていった。徹底搜索するとベッドと布団の隙間に嵌まり込んでいた。慌てふためく我々を尻目に、ねずみは再び部屋を飛び出して階段を駆け下り、廊下をダッシュして玄関へ遁走した。そして煙のように消えてしまった。しかし、玄関はぴったりしまっている。もう袋のねずみである。やがて靴箱のすみに固まっているのを発見した。その後、すったもんだの奮闘のすえ、捕虫網でめでたく確保に成功した。この間、一時間を費やす大捕物だった。捕まえてみれば、ねずみは目がクリクリしていてとてもかわいかった。2年前に他界したチャチャ（猫）が愛用していたねずみのおもちゃそっくりだった。

逮捕したねずみについて、母と妻は、断固死刑を主張した。日頃「モフモフ」などというテレビを見て「きゃーかわいい！」と言っているわりに血も涙もない。女子というのは、いざという局面において、やるべきことを冷静に遂行する胆力を持っているのではないだろうか。私がこう思うのには理由がある。かつて裁判員制度が導入されたころ、一般人を裁判員にして模擬裁判を行うという報道番組を見たことがある。被告は、二人を殺害した強盗犯という設定だった。架空の裁判ながら、裁判員たちの討論は真剣だった。判決は、男女できっぱり分かれた。男性裁判員たちは最初、刑法に照らして死刑は当然と主張していたが、犯人の不幸な過去が明らかになるにつれて腰砕けになり、結局死刑判決を回避した。対して女性裁判員たちは最初、死刑はかわいそうだななどと言っていたが、裁判の進行とともに冷静になっていき、最後には涙を流しながらも死刑判決を下したのである。男子というのは、合理性を重視するようであるが実は情緒的であり、女子というのは、情緒的にみえて実は合理的ではないのか。（※以上は、あくまで個人的見解に過ぎません。）

結局ねずみは、情に流された私の独断で追放刑に処すことにした。ねずみを拘束した捕虫網を担いで1キロほど歩き、空き地の草むらに逃がしてやった。家に帰りながら、「まさか、付いて来るんじゃないだろうな。」とついつい後ろを振り返る。確か来年は子年（ねずみ寿）だったと思う。戻ってきたらそれはそれで話のタネになると自分で勝手に納得した。その後、1年、間違えていたことに気が付いた。残念ながら来年は、子年ではなく亥年（いのしし寿）だったのだ。

（「皆様、良いお年を！」というオチです。）